

小倉事件

高田 友

112 靈元院は108 後水尾院の皇子にておはします。御姊109 明正院、御兄110 後光明院、御兄111 後西院の跡を襲ひて、御齡十にて祖宗の神器を承繼したまふ。時に一六六三年。大樹は四代家綱。

靈元院中宮鷹司房子に皇子あらせられず、而して、一六七一年、小倉實起女、一宮を生み奉る。於是乎、後水尾院の叡旨にて、一宮を後繼と定むれども、未だ立太子のことなかりき。

一六七五年、典司松木宗子（藤原）の御腹に、五宮朝仁親王誕生あらせたまふ。如何なるゆゑかは知らねども、靈元院五宮を鍾愛したまひ、密かに一宮の廢嫡を望ませたまふ。一六七七年、靈元院は柳營に敕使を派して、その旨を申し入れらる。然れども、後水尾院と東福門院（秀忠女和子）の御同意なきを以て、家綱難色を示す。

一六八〇年五月家綱薨去、繼いで八月に後水尾院崩御あらせらる。五代綱吉は皇室と有和せんとの素志固く、後水尾院逝世したまひける上は何條敕諭に背き奉るの理あるべきとて、五宮立太子に異を立つまじきの段奉答す。

嗚呼、非道なるかな。無慚なるかな。一宮は出家仰せ付けられたまふ。外祖父實起、皇子を匿ひ奉り、これを察知したる院は廷臣を遣はして、宮を見出し給ふ。いまだ十一歳の宮は激しく抵抗せさせたまふも、廷臣強ちに薙髪せしめ奉る。

實起は、正二位權大納言なりしかども、敕命に抗したるを以て佐渡島に配せられ、つひに此の地に歿す。その恨み遣らん方なし。靈元院は、兄にして師なる後西院に不吉なる追號を贈り奉りし惡業の君、今また秋霜烈日、逡巡あらせられぬ非道を行ひたまふ。遡ること三百年の往時に、親とも言ふべき恩人花園院を裏切り奉りし光嚴院と並びたまひ、如今朝家直系の祖とは言ひ條、爰許臣民の分を以て、敢て夏桀殷紂とぞ申し上ぐる。

ここに中院通茂なる公卿あり。從一位内大臣を拜して、後水尾法皇の信任篤し。通茂は、法皇と前將軍の逝世あるや、掌を返したまひたる帝を誠なき主上とて、面を犯して諫め奉り、つひに罵詈雑言を口にす。剩へ、新將軍綱吉の苛酷なるを知りつつ、公然とその非を鳴らす。これに據りて、追放處分に處せられたれども、後に宥免あり。命永らへたるが僥倖なりしといふべし。

思ひきや、この人、中院通村の孫なりとは。通村は、後水尾院未だ弱年にておはしましし砌、武家傳奏に任ぜらる。院の御退位に際し、身の危ふきを顧みずして幕府にあらがひ、忠烈楠公に装へらるる剛毅の人なりき。その孫にして、またまた同じ後水尾院の遺命を守らんとて、義に殉げんと覺悟を決めたるの志。ああ、武士だに我が身を保たんと義も理も鴻毛の輕きに疎んずる世、公家の身にしてかかる忠烈を世に示したるは争か末代に語り傳へであるべしや。

一宮の師たるべきは後水尾院の皇弟・性眞法親王、之に任ぜられ給ふ。法親王、通茂の皇家の譽に疵を付けじと挺身盡力するを見て、感ずる所あり、一旦は一宮の領導を辭したまひき。

この椿事の顛末を「小倉事件」とぞ申すめる。

後に五宮踐祚して萬乗の位に即きたまふ。すなはち東山院にておはします。

（平成三十一年一月十五日受附）